



今回の「HONTO」は、美術の大久保先生です。先生は美術の授業以外にも制作活動をされています。その作品はとても個性的で、また、見る人の心に何かを呼びおこさせます。それを言語化できれば美術評論家として生きていくことができるかもしれませんが、今はそれはしません。大久保先生の紹介する本はこちらです。



大久保先生の作品

これ全部、焼き物です。スポンジや軍手だと思って触るとびっくりします。

人生は一度きり？

芸術科美術 大久保陽平

こんにちは、美術科の大久保陽平です。

みなさん「人生は一度きり」という言葉はよく聞きますよね？

当たり前でもあるし、みなさん理解はしていると思います。しかし、なかなか実感はできないものです。私もそう思います。本当に一度きりであると実感する時は、まさに死ぬ直前かもしれません。

そこでみなさんに聞きます。生きている間に人生を何回も経験できたら、人生を何回も見ることができたら、他人の人生を垣間見ることができたら、どうでしょう？さらに言えば未来を先に見ることができれば、すごいと思いませんか？

本にはたくさんの人の人生が込められています。考えようによっては、本を読めば本の数だけ、他人の人生を見ることができ、先人たちの人生を体験することができるのかもしれませんが。さらに、本の中には数々の失敗と反省も書かれ、大成功も書いてあります。お金を稼ぐ方法も書いてありますし、恋愛の仕方も書いています。本にはこの世、いやこの世だけではなく、真実や仮説、嘘、空想、歴史などなどすべての事が書いてあります。そう考えると本を読むことは、自分以外の人の人生を疑似体験でき、先取りできる「得」なことなのかもしれません。

前置きが長くなりましたが、こんなこと言っておいてそこまで本を読んでいない私です。それでも、いくつか読んだ中で、私がビリビリきた本を紹介します。美術関係の本や画集も紹介したいのですが、知りたい人は個人的に聞きに来て下さいね。

今回は、おそらくほぼ99.9%、私やみなさんが体験しないであろう壮絶な人生が書かれた本、タイトルを見るだけでも恐ろしい、ノンフィクション作品『墜落遺体』という本を紹介します。なぜこの本を読んだかと言いますと、私の誕生日は1984年の8月13日なのですが、その1年後の1985年8月12日に群馬県御巣鷹山に飛行機の日航機123便が墜落し、一瞬にして520人のいのちが奪われるという事故があったからです。毎年、

# 読書で人の人生をなぞる『墜落遺体』大久保陽平

私の誕生日になるとテレビではよくこのニュースが流れ、よく目にしていたことと、誰かがまとめた「一生のうちに読んでおいたほうがいい本リスト」の中にあっただけあって読むことにしました。読んだのは確か、大学1年生の夏だったと思います。

このお話はこの本の著者、飯塚訓氏が、残念ながらこの大事故で亡くなった方達の遺体の身元確認の責任者として最前線で捜査した、全遺体の身元が確認されるまでの壮絶な127日間の記録をそのまま書いたものです。

内容を少し紹介すると、タイトルにあるように飛行機事故の凄惨な現場の様子が淡々と描かれています。事故に合われた方の遺体の損傷は激しく、中には3つ目になった遺体もあります。何百Gもの衝撃で頭部の中に他人の頭部がめり込んだものだそうです。ほとんどの遺体は挫滅、離断し、さらに炭化したものであり、そのご遺体を家族のもとへ帰してあげるためにたくさんの方達が昼夜を問わず作業しています。



原型をとどめない遺体を清拭し、生前の面影をなんとか残そうときれいにファンデーションを塗ってあげる日本赤十字の看護婦。遺体がほんのわずかであっても身元確認作業をご遺族のためになんとか判断しようと奮闘する医師や歯科医。そして、そのご遺体を確認し、現実を受け止めたくないがしなければならない、想像も出来ないくらいの絶望と深い悲しみと怒りを持ち、

発狂されるご遺族。現場で遺体であるかどうか判断が難しいものもある中、なんとか少しでもご遺族に届けるために現場にとどまりつづけ遺体回収に従事する自衛隊。不幸にも加害者とされ、ご遺族の方の対応と世話係をされる日本航空の社員たち。奇跡的に4名の生存者もいます。体育館の中で作業は行われていますが、泣き叫ぶ声や怒号、正気でいられなくなった作業員、線香やご遺体の匂いまで伝わる、凄惨なまさに修羅場な状況の中を事細かく書きつづった文章は、19歳だった私にビリビリと衝撃を与えたことを覚えています。

いのちの重さとか、尊さ、はかなさとかそんな月並みな表現が出来ないほどの現実の死がそこには描かれました。もしかしたら、亡くなった方達より生き続けなければならない残された遺族やそれに関わるすべての方々の方が辛く、大変な思いをするのではないかと想像されます。しかし、残された今を生きる人や私たちは、これから楽しいこともうれしいことも得ることができますが、亡くなった方たちは楽しむことも出来ません。やはりせつなく授かった命、一度きりの人生なのでもちろん大変なこともたくさんありますが、今をそして何事も楽しまないと、と思わされます。

みなさんも読めたら読んでみて下さい。「死にたい」や、「死ね」と言う言葉を簡単には言えなくなると思います。

ぜひ、みなさんドキドキする本、ビリビリくる本、読んで良かったと思わされる本、人に紹介したくなる本に巡り会って、人の人生を自分のモノにしてください。そして、たくさんの視点を持って、ぜひ「得」にしてください。